



OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱ ゾンタクラブ第52号(2021年9月)



巻頭言

「子ども虐待の見方と支援」セミナー特集に寄せて

会長 幡山 玲子



大阪Ⅱ ゾンタクラブは、女性と女兒への暴力撲滅を目指している国際ゾンタの活動の一環として3月国際女性デーに「子ども虐待の見方と支援」と題したセミナーを開催しました。虐待の経験者のみきさん、虐待を受けた子供等の支援に当たられている児童福祉士の塚本真代さん、そして子ども食堂等の実践者であり、現実と密着して研究に当たられている山縣文治教授のお三方をお招きして、それぞれの立場から児童虐待についてご講演いただきました。

コロナ禍の下増えてきているといわれる児童虐待というのは目につきにくい暴力です。声を上げにくい児童に対して家庭内で両親等から受ける暴力です。向こう3軒両隣という濃密な近所付き合いがなくなった現在、周りが気づきにくい暴力です。セミナー当時虐待の末亡くなった心愛ちゃんの報道が新聞紙上を賑わしていて心つぶれる思いでいたこともあり、虐待をどうすれば防ぐことができるのか、せっかく生を受けて誕生してきた子供たちが亡くなることなく十二分に自らの生を生きることができるよう、個人として何ができるのか、また女兒に対する暴力撲滅を標榜するゾンシャンとして何をなすべきなのか、講演を拝聴して、とても難しい宿題を課せられた気がしました。

今回の広報誌では、特集としてその時のご講演の内容を3分の1程度にまとめたものを収録しました。虐待を目にしたとき、プライバシーの牙城である家庭内のことについて個人がどこまで関われるのか、どうすればいいのか考える端緒になればとの思いから、掲載することにいたしました。お三方は虐待を受けた児童を救済するだけでなく、虐待する側の支援も必要となると口を揃えられます。虐待を防ぐには、被害者・加害者双方について「いつでも戻ることができる場所や人がいることを信じていることができる」関係性、安心・安全なそして安定した居場所を作ることだというのがお三方の共通認識です。では、私たちはその信頼できる関係性の構築のために何ができるのか、どこまで関与できるのか、この特集がこの課題を解決する糸口になれば幸いです。

最後になりましたが、当日リアルでもたりリモートでセミナーにご参集下さいました皆様にこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

「子ども虐待の見方と支援」セミナー

日 時：2021年3月7日（日）14時～16時

場 所：リードあしや（あしや市民活動センター）

講 師：山縣文治氏（関西大学人間健康学部教授）

塚本真代氏（大阪市子ども支援センター相談支援員）

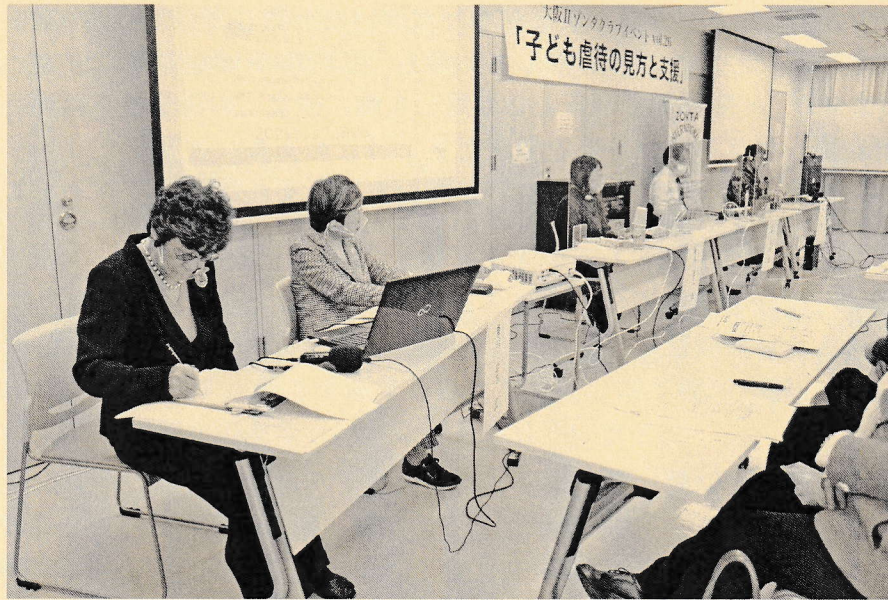
みき氏（当事者）

（以下は3人の講演者の当日のご発表の内容を3分の1ほどに縮めたものです。）

司会：それでは早速、虐待を受けた経験のあるみきさんからのお話、よろしくお願いいたします。

みき氏：私は、広島でアル中の父、母、5歳年上の姉の元に生まれました。母は、「あなたが男の子だったら」とよく言っていました。酒乱の父は、男の子を望んでいて、私が男の子だったら、父が少しは良くなるかもという淡い期待があったのだと思います。私が7歳の時に、父が問題を起こして離婚することになり、母と姉と東京に上京したのですが、3人の生活はとても貧困でした。私は、いつも、母の顔色を見ていました。とにかく親が怖かった。母は「あんたの前と後に子どもを一人おろしている。あんたのことは生んでやったんだ。感謝してんのか」と言っていました。小学校2年か3年生の時、性的虐待被害に遭いました。その後、雨戸を閉めて泣いていたら、帰ってきた姉に「このことは誰にも言ったらダメよ」と言われ、誰にも言えませんでした。なかったように普通にしているけど、私にはそれが大きいことでした。中2で私は、当時の彼氏と家を出ましたが、すぐに家に連れ戻されました。私が「家に帰れというなら、また家を出る」と言ったら、母がアパートを借りてくれたので、彼氏と暮らし始めました。そして私は妊娠したのですが、どうしたらいいかわらず、誰にも言えないまま妊娠6カ月になりました。結局、その子は死産しました。今思うと、中学の私がアパートを借りてもらって生活していることや、妊娠6カ月を過ぎてお腹が大きくなってきても誰も何も言ってくれなかったのは、おかしいと思います。結局私の「助けて」の声は誰にも届きませんでした。これは私の中で大きな恨みとなり、私自身を苦しめました。私は21歳で結婚して年子で長男、長女を産みました。でも長女は6か月の時に突然死で亡くなりました。その翌年どうしても長女の死を受け入れられず、次女を出産します。この子は私が本当に欲しくて欲しくて望んだ子でした。でも「この子までなくしたらどうしよう」といつも不安でした。だから次女がよく寝ていると息をしているか心配になりました。本当に怖かった。私は子どもを失ったというトラウマを抱え、いつも怯えながら子育てをしていました。でも、相談することや助けを求める方法を知りませんでした。

そのような中で、離婚して、薬物を使うようになり自殺願望を持つようになりました。そして最後は母の住んでる団地の9階のフロアから飛び降りようとしたことがあります。その時、私は死ぬことで、母の心に一生残る傷をつけ、「私はここにいたんだ」と伝えて母への恨みをはらそうとしたんだと思います。私は薬物の回復施設につながった後も、自分が母親から虐待を受けていたと認めることに抵抗がありました。なぜなら、私は薬を使いながら子どもをネグレクトしていて、薬の切れ目で動けなくなっていた時に子どもに看病してもらっています。子どもの小さい手で一生懸命しぼったおしぼりを私の頭に掛けて「ママ大丈夫？」と心配してくれました。「どうしてこんな私が好きなの？」と子どもが優しくしてくれればしてくれるほど、私は傷ついていました。そうやって子供を傷つけてきた自分には、親から傷つけられたと言う資格がないと思っていました。でも、みんなが子どもの頃のしんどい話をしている中で、共感して涙がでてくるのです。そして、私も自然に話すようになっていました。そのなかで、虐待されてきたことに向き合えないと、生きづらさから解放されないと思えるようになり、たくさん怒り、たくさん泣き、自分の感情を取り戻しました。



私の母は今、87歳です。私は3年前からパーキンソン病の母の介護のために東京に通い始めます。しかし母は一人暮らしができなくなり、去年の11月に「要介護3」になって特養への入居要件を満たした時に「120人待ち」と言われました。そして「東京に血縁関係が何人居るかで施設も受け入れ体制が違う」と言われ、私の子どもたちや姉の子どもにも関わってもらい始めました。それまでは、私が一人で母の介護に関わっていましたが、京都にいる私だけではもうどうにもならない状況でした。でも、すぐに、私の子どもや姪は、「無理。おばあちゃんには関われない」と言いました。そこで私は母とは疎遠になっている姉にお願いするしかありませんでした。姉は母との関係性が悪く「死んでもおばあさんに会いたくない」と言っている人でした。でも母の特養入居までの道のりを快く引き受けてくれました。そこから姉は母が特養に入れるように交渉を頑張ってくれて、母は12月に特養に入居することができました。しかし姉は幼少期の虐待の傷から薬物依存、買い物依存症が再発し2月18日に自死しました。もちろん母親に殺されたわけではありませんが、あのまま関わらないでいたら生きていたと思います。姉は母と関わるのに、依存で感情を麻痺させる必要があったのだと思います。

私が子どもの頃「一時的でも安心安全な場所、緊張しないところ」が欲しいと思っていました。その当時虐待されていることを隠していたのは、私が話したことで母が怒られ、そのことで母に私が怒られる構図が分かっていたからです。だから言いませんでした。子どもは親から怒られたり、虐待されることはもちろん望んでいません。でも親が他人に責められたり「ダメな奴扱い」や「悪者扱い」されることも望んでいないと思います。だから、子どもの声をキャッチしようとするならば、母親自身が抱えている「傷ついている子ども」を癒すような支援が必要だと思います。虐待している親も「傷」を持っていることに焦点を当てていかないと連鎖することがあります。私はそうでした。どんな親でも子どもは無条件に親が大好きだから、母親が元気になることによって子どもは元気になります。母親のストレスが子どもにいくのだとしたら、母親のケアが大事だと思います。そして、子どもとうまく関われない人たちに必要なのは「指導」ではなく「共感」だと思います。指導されている内容は分かっているけど「それがうまくできないんだよね」という共感。例えば、「お子さん、どうですか？」と聞かれると、それだけで母親は責められているように感じるかもしれません。子どもが赤ちゃんの時に、保健所の人に来て「お母さん、どうですか？」と聞いてくれるのがずっと続けばいいと思います。私は回復施設につながり、私自身のケアを受けたことで、5歳の時に離れた娘と向き合えるようになりました。娘が中学2年の時に、なんで離ればなれになったかなどそれまで彼女が抱いていた色々な疑問に私は正直に答えました。娘を引き取りたいけれども薬物を止め続けられるという自信がなくて、もし娘を引き取ってから再使用してもっと傷つけてしまうのではないか

という恐れがあり、なかなか娘を引き取る決心がつかなかったと話しました。彼女は、自分の人生に起こった出来事の「辻褃が合った」と言ってくれました。今も、私の中では幼少期に彼女と離れたことはとても寂しいことではありますが、一生親子であるという思いを胸に彼女との関係性を再構築している最中です。虐待してしまう親が支援、ケアを受けることで子どもに「ごめんね」と言えたり、子どもの怒りや悲しみを受け止められるような大人になるかもしれないと思います。それは親子でコミュニケーションを取れるようになるということでもあると思います。

司会：ご自分の深く重い経験をお話しいただき、ありがとうございました。では、次に児童福祉機関で主として虐待の事例を担当されている塚本真代さん（大阪市こども相談センター児童福祉司）の日々の仕事の中からお話しいただきます。

塚本真代氏：高齢者、精神障がい者、児童の3領域を通じて、最初に家族の中で何が起きているのかということを考えました。高齢になり、力関係が逆転した結果、過去に虐待をうけた側が、要介護状態になった高齢者に仕返すことが、結果的に虐待になるという状況に出会いました。精神障がい者領域では、精神疾患の背景にある児童虐待の影響の深さを知りました。子ども時代に家族の中に暴力や依存症等の問題があり、虐待を受けて心に痛みを抱える方たちが、適切なサポートを受ける機会があれば違う人生があったのではないだろうかと思っていました。

しかし実際に児童領域で働くようになり、それは簡単なことではないことを知りました。

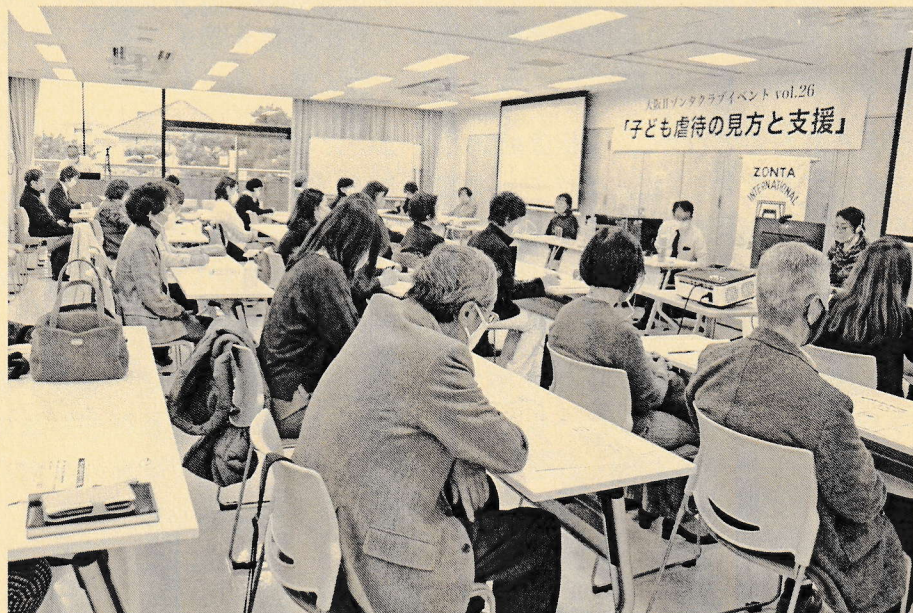
子どもが出してくる、さまざまな行動面や感情面の課題の背後には、二世帯、三世帯と持ち越されたやり残した宿題なのだと思うことがよくあります。

非行やリストカット、不登校等の目の前に見えている課題にだけ焦点を当てて、それを何とか取り除こうとしても、それはなかなか難しく、一見解決したかのように見えて、また新たな課題が出てくることになります。その課題の背後に隠されている本質を探り当て、アプローチし、支援していく必要があります。どうすれば、子どもや親が安心感を見つけられるかということを考えていくようにしています。また子どもと親が地域で生活するためには、親子の応援団をいかに増やしていけるかが大事になり、応援団を増やすためのネットワーク作りが必要です。

援助関係の中で心がけていることです。まずは、1対1の関係性の中で、傾聴や共感を通じて、信頼や安心感を持ってもらえることを基本にします。次に、親子間の橋渡しや通訳者になることも大切です。双方気持ちはあるものの、表現がズレていることが多々あるからです。支援者がお互いに理解し合えるようなお手伝いをする作業が必要です。子どもたちは生き延びるためにいろいろな出し方をします。その方法が自分を傷つけたり、周りの大人を困らせたりするので、適切な出し方を身につけられるように一緒に考えていきます。自分の感情を感じることも、思いを言語化することも苦手です。混乱や予測不能な家族内の出来事を一つ一つ聞き取りながら、過去に何があり、それが現在の生活にどんな影響を与えているのかということ丁寧に見ながら、過去と現在をつなげる作業をしてもらいます。これが心の傷の癒しにつながっていったり、今を生きることにつながるので、それを意識しています。そもそも助けを求めるといふことすら知らないことも多く、その方法や経験をしてもらってから始めないといけないこともあります。

最後に私がいつも大切にしていることです。当事者には力があるということです。当事者は自分自身の一番の専門家であり、本来は自分で自分を助ける力があるものの、何らかの事情で弱ってるから、当事者がもっと力を出していけるように伴走したり、よりそったりすることが、支援関係で大切にしていることです。そして、いつでも戻ることができる場所や人がいることを信じられるようになって欲しいと思います。信じることはとても難しいです。見捨てられ不安があったり、裏切られた経験があると、難しい場合

もあるけれども、何らかの縁で出会い、ひとりぼっちではないということを信じるができるようになれば、そんな出会いや居場所を見つけることができれば、生きていて良かったと思える日が来るかもしれないし、来て欲しいと心に願いながら日々、子どもやその家族と話をさせていただいています。



司会：ありがとうございました。それでは次に、山縣文治さん（関西大学教授）をお願いいたします。山縣先生は2つの顔をお持ちで、1つは「つどいの広場事業」や「子ども食堂」といった事業の提唱・実践者であり、もう1つは研究者で、常に現実と密着して研究されています。今日は研究者として山縣先生、よろしくお願いいたします。

山縣文治氏：ご存じのように、虐待相談がすごく増えています。特に児童相談所が受け付ける相談がすごく増え、ついに16万件というところまで来ました。一方で、虐待で亡くなった子どもたちは、増えているような感じがしますが、ここ10年は50から70件程度で、増減を繰り返しており、横ばい状況です。

「なぜですか」と聞かれると、これは「分かりません」としか言いようがないんです。察するところ理由の1つは、児童相談所（都道府県）が中心であった子どもの虐待のへ対応が、市町村中心になり、身近な所での支援が進んだことにあるのではないかと考えています。死亡する子どもは3歳未満児が多いので、母子保健サービスの充実の影響が大きいのではないかと思います。福祉とは独立した関係にあった母子保健サービスが、今では、福祉と連携しておこなわれるのが当たり前になったということです。母子保健施策の効果は、私は結構あるのではないかと思います。

もう一つは地域住民や、保育所、認定こども園、幼稚園などの関心や意識が高まって、早めに相談（通告）するようになった。ご家族以外が相談できるようになってきた。ここも結構大きいかと思います。

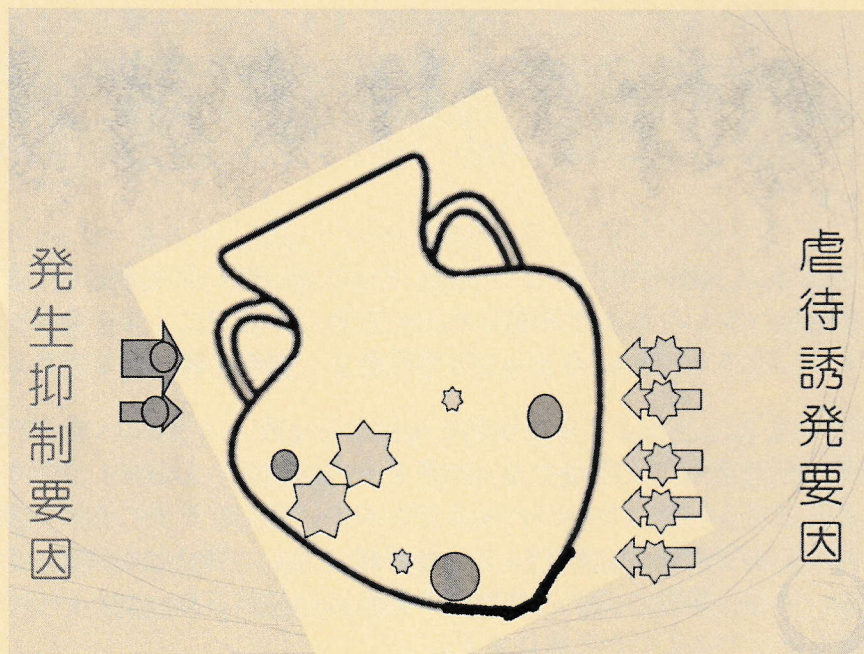
「虐待死亡は決して増えていないのだから、問題ないですよ」というつもりは全くありません。死亡事案の中でも、実は細かく見ると、何が減っているかと言うと小学校高学年から高校生ぐらいの死亡です。一方、ほとんど減っていないのが0日児死亡です。これについては、対策が難しい。0日児死亡の状況を想像してみてください。その子どもはどこで生まれていますか。もし、病院で生まれて、普通分娩の場合、その日のうちに退院することは日本ではほとんどない。入院中に虐待で死亡するという事はほとんどありません。ということは、病院外、多くは自宅出産ということになります。自宅出産で虐待死となる場合、

妊娠の届出もほとんどされていませんから、行政的に見ると、「存在していない子ども」ということになり、関わりが難しくなるわけです。

次に、先ほど話題提供いただいたお二方が使われた言葉で、全面否定をするつもりはありませんが、「その言葉を使わずに対応したいなあ」と思っているのが、「虐待の連鎖」という言葉です。なぜ使いたくないかということ、私は5年間ぐらい社会的、特に虐待を受けた子どもたちのインタビューを4人のチームでおこない、毎月雑誌に原稿を書いています。

その中で出会った子どもたちのなかに、「私は結婚してはいけない」、「私は子どもを産んではいけない」、という男女がときどき出てきます。「なんで？」って聞いたら「私は虐待を受けてきた。虐待を受けた人たちは連鎖するというふうに児童養護施設の先生に聞いた。私が産んだら子どもが私と同じように不幸になる、だから私は産んではいけない」ということを言った子が3人くらいいたんです。「連鎖」という言葉を使わずに、連鎖も含めた説明ができればいいなと思いました。

もう一方で、「虐待を受けた子は本当に全部虐待するんですか」と言う、実は児童相談所に通告されるようなほどの虐待をせずに子育てをしている人の方が圧倒的に多数だと私は思います。逆に、虐待を受けずに育っても、親になって虐待をする人も出てきます。これも多数派ではありませんが、虐待を受けている、受けていないによって分ける考え方は避けたいと思ひまして、新しい考え方をしてみようと思ひました。

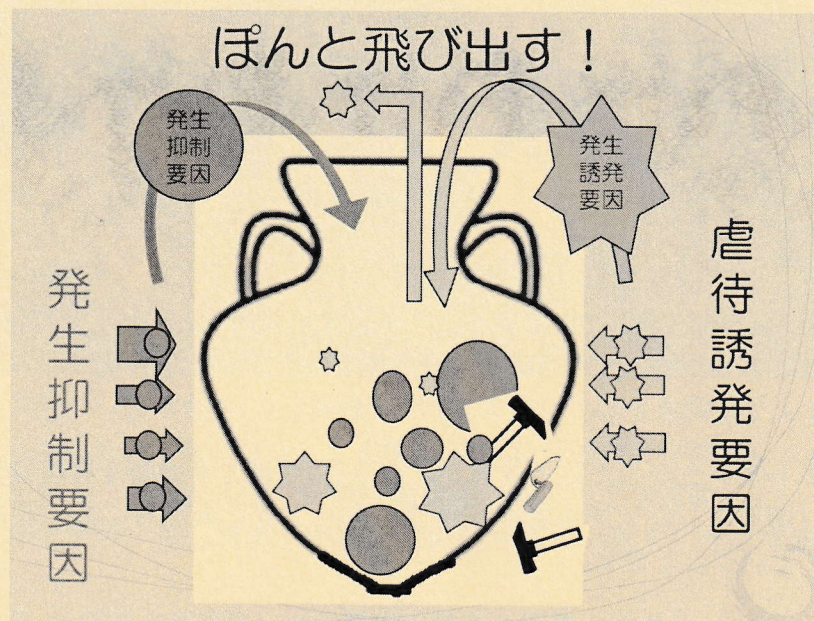


仮に人間の体の中には男女ともに虐待に関わる「壺」があるというのを想定します。その壺は誰でも持っている。図に、青色で左の方に発生抑制要因と書いています。「虐待なんかしちゃいけないよ」と働くもの。右側、赤色で書いてあるのが虐待誘発要因。「虐待しろ、虐待しろ」というもの。この2つのものが、一人ひとりの壺の中に入っている。ただ虐待を受けて育った人は、虐待誘発要因が多めに入っている可能性があると思っていますが、発生抑制要因も入っています。虐待しない人も、虐待誘発要因はもっています。今話題のウイルスでいうと、陽性だが無症状という感じでしょうか。

次に、壺の外（環境）を考えます。子どもたちが育つプロセスの中で、発生抑制要因、虐待誘発要因の

双方と出会います。発生抑制要因は、教育とか、あるいは親族からの支援、保健センターからの支援、保健師さんたちの支援とかいろんなものが考えられます。一方で、虐待誘発要因は、遊びたいけど子どもが邪魔、酒飲むとつい手荒になるなど、虐待に結びつくような要因です。貧困もその一つでしょう。

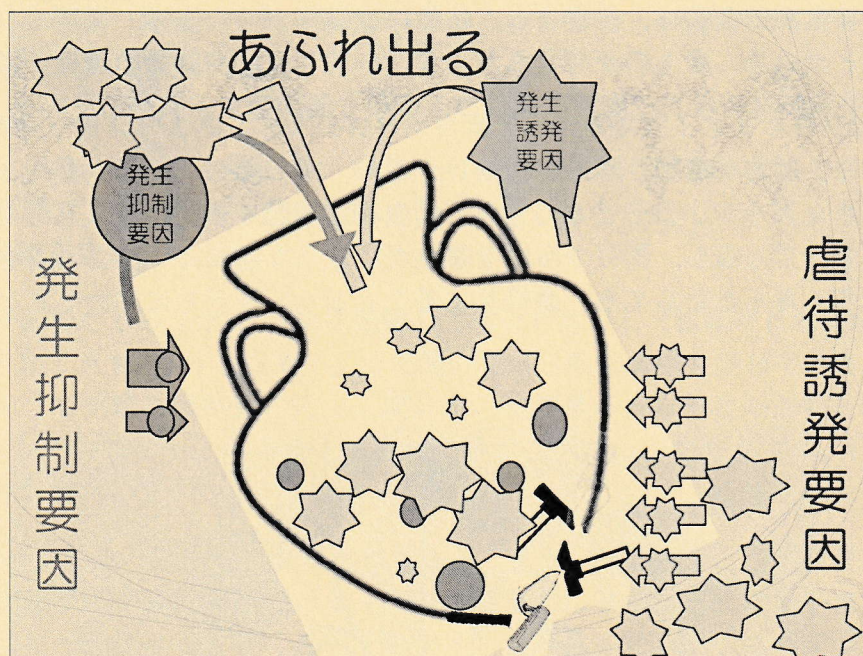
育つプロセスの中で、両方の要因からの働きかけがあり、その中の一部は内面化していきます。虐待誘発要因が始めはたくさん入っていた子どもたちも、発生抑制要因を多めに投入してあげると、中で、自分でそれに対応する力も出てくるし、周りから壺を壊さないような支える力、これをきっちりやれば、虐待誘発要因が壺の中に多くあったとしても、虐待をすることなく、子どもに関わることができるのではないかと考えられます。



ただ、時々勢い余って飛び出す虐待誘発要因がある。「ポーンと飛び出す」という感じ。これは、一時的な虐待とか体罰と考えていいのではないかな。こういう状態であつたら分離などは必要なくて、周りが色々な声掛けをしてたり、こういうやり方があるよ、体罰をしない子育ての仕方もあるんですよ、というような働き掛けをすることで、親子が一緒に暮らすことができるわけです。

ところがついに耐えきれなくなって壺が傾いてしまうことがある。傾いてしまった状態というのは、おそらく、発生抑制要因よりも虐待誘発要因のほうがずっと多くなって、立っていることができなくなって倒れてしまう状態です。そうなってくると中に入っていくのも発生抑制要因は少なくて、虐待誘発要因の方がどんどん中で増えてくる。お互いに反応しあって、発生抑制要因を消してしまったりするようなこともやっている。傾いていますから、虐待誘発要因がいっぱいになったらあふれ出てくる。虐待が頻発するという状態をイメージします。そうなってくると本人たちだけの力とか地域だけの力ではかなり難しくなってきたりして専門家の支援が必要になってくると考えられます。

さらに深刻になった状態がついに壁が完全に壊れてしまって、そこから抜け出る状態です。こうなってきたらもう地域では支援、市町村での支援も無理だということで、一時保護になり分離というのが必要になってきて、壺を修繕修復しなければ対応できない。



図の右下に、コテと金槌があります。金槌は強度の虐待誘発要因で、壺を壊すような働きをしています。壺の壁をドンドン叩いて中からも外からも破るような働きをしています。一方で、コテは発生抑制要因で、壺を一生懸命修繕するような働きをしています。壺の壁を挟んで、せめぎ合いが起こっていると思います。

この2つの壺の絵から言いたかったことは何かということ、「誰でも虐待する可能性がありますよ」ということ、もう一つは「虐待をした人でも虐待を受けて育ってきた人でも、大人になって虐待をしない可能性もあるんですよ」ということです。

虐待を起こさないためには、発生抑制要因が非常に重要です。発生抑制要因は、子どもに対する働きか、保護者に対する働きかけ、地域に対する働きかけ、という3つの方向があるのではないかと。子どもの支援、保護者の支援、地域の支援です。地域そのものが親子を温かく見守ってくれるような状況でなければ、虐待をしてしまいます。親子が社会から孤立しないようにしなければなりません。

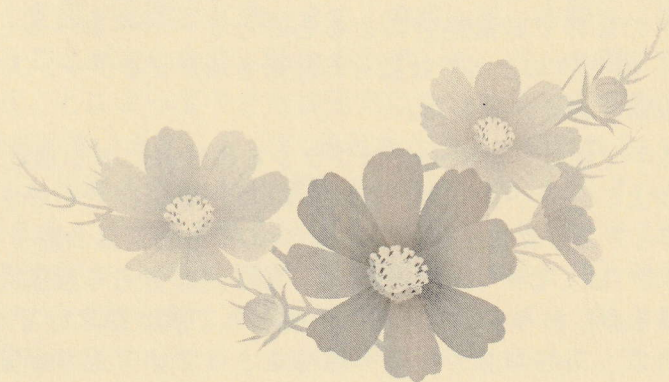
虐待死を起こすような家の特徴というほどでもないけれども、比較的共通している特性は何かということ、孤立しているということです。私の経験では、親族から孤立してしまうと大変です。親族が最後の砦ですから。ただ親族だけがすごく大切だと思っているわけではありません。日本の現状の社会の中で親族から孤立するタイプの家は地域からも孤立しがちです。人間関係がうまくとれない、人との関係がうまくとれないような家が比較的多い。親族から切れた状態は、壺が壊れやすい、危険度が高いと思っています。

次はよく言われる話なんですけど、虐待の予防の4段階、普通3段階と言いますが、私は敢えて4段階に分けて説明しています。早期発見・早期対応と、深刻化・予防回復的支援を分けるということです。深刻化・予防回復的支援では、保護者への支援、子どもの回復への支援もしないといけないことを強調しています。それぞれの関わり方については、時間がないのでお話できないんですが、第一次予防、発生の予防について言うと、今、「児童相談所も頑張れ」ということになっていますが、児童相談所に期待するのは無理だと思っています。そんな忙しいところでさせられない。住民に発生予防を期待するのも少し過剰ではないかと思っています。市町村が、一番責任が高いということです。ただ第二次予防早期発見早期対応ですね。こうなってくると今度は住民もちょっと頑張るね、隣人として頑張るね、ここも見相ではないかと思っています。重度化・深刻化・回復的支援になってくると見相の働きが非常に

大きくなってきて、市町村がその次で、一般住民は、「あまりそこまで手を出さないほうがいいよ、危険領域ですよ」と思っています。最後の四次予防、つまり、再発の予防アフターケアになってくると市町村が中心になるのかなと思います。

時間がせまっていますので、最後のものをシェアして終わりたいと思います。子ども虐待の支援あるいは子育ての支援で、非常に重要なのは、「安全」「安心」「安定」。「安」が3つあるので「安三（産）の郷」と、なぜか語呂合わせがいっぱいあるんですけど、とりあえず今日は「安三の郷」だけについて話します。虐待支援は「安三でない郷」で育った子どもたちに、もう1回、安三、新たな安三の郷を提供すること。それは保護者を通じて提供するのか、保護者以外、里親さんとか児童養護施設さんとか、保育士さんとか、親以外も当然愛着の対象になります。親を排除するわけでなく、親が機能し難い場合には、他のものを早めに提供するということが必要なのかなということを感じています。

司会：どうも、ありがとうございました。



2021年5月第13回エリアミーティングに参加して

西村 博子



第13回エリアミーティングは、コロナ禍の中、動画による配信と活動報告書による報告という形で行われました。昨年に引き続き、対面での会議はありませんでしたが、今までにない参加の仕方での新たな体験と学びができました。

それは、4つのエリアのミーティングを拝聴してその特色を学んだことです。共通のテーマは「国際ゾンタを知ろう」「国際ゾンタの4つの奉仕と4つの教育プログラムについて」。国際ゾンタの取り組みと組織をより身近に感じました。

そしてエリア3のテーマは「パワーアップして更なる一歩へ」でした。西川ADによる方針にうなづき、クラブ会長によるトピックスでは、各クラブの特色ある活動の現状と未来、その思いに勇気づけられ、また11名の新入会員からのメッセージはとてもフレッシュな気持ちになりました。

ワークショップは、浅野会員委員長による「会員増強と会員維持について」をテーマに、会員の3つの課題「退会、継続、獲得」、ゾンタの目標を達成するためにもいかに取り組んでいけるでしょうか！自分自身の入会時を振り返る機会にもなり、あらたな視点での学びに大いに勇気づけられました。エンパワーメントですね。

今回の学びを生かして、具体的な行動を、クラブの強みを生かして今何が出来るのでしょうか、私たちに求められています。コロナ禍の中、ピンチはチャンス。

動画配信のおかげで、対面ではないものの久しぶりに全国のゾンシャンのご活躍に触れ、勇気をもらって嬉しいひと時でした。動画配信の編集に感謝です。

来年はコロナ感染が落ち着いて、対面での会議が開催されますよう祈ります。

エリアミーティング動画を視聴して

宇川 久子



大変見ごたえのある動画でした。私はゾンタクラブに入会して半年余り、初めてのエリアミーティングになる訳ですが、対面でのミーティングと違い動画は国際ゾンタのこともよくわかり、各エリアの取り組みもよくわかり、何度も見ることもできて大いに有難い面がありました。お目にかかることのできない他エリアのメンバーの方々とも繋がることのできた感がありました。

基調講演も繰り返して聞くことができ、虐待ということについてより深く理解することができました。

空飛ぶ車いすの話には、カンチャナブリに行ったことがあるので興味をひかれました。もう随分前になりますが建設ラッシュと交通渋滞のバンコク、優雅な避暑地ホアヒン、国境近くの静かなカンチャナブリを旅行しました。あんな所に車いすを？という興味です。

車いすは歩けなくなった人の移動手段、これがあるからこそ医者通いもでき、家の中の移動もできる必需品ですが決して安くはないものなので廃棄処分になるものをオーバーホールしての再利用は使用する側にとっては大助かりのはずです。高校生にとっては自分の技術を活かせるチャンスでやりがいのある仕事になってウインウインの大変よい活動だと思いました。

他にもよい活動が色々ある中で私は、金沢の“歯ブラシを施設等に送る活動”、大津の“クリスマスパーティーに子供を招く活動”がよいと思いました。以前、母の介護をしてくださった30代の女性が我が家に家族と自分の分のケーキを持ってこられました。“お茶以外のサービスはお断りします”というケアセンターに所属されている方だったので“はてな？”と思ったら、“私は施設育ちで家族団欒というものを知りません。一度でいいからそういうものをあじわってみたくて”と言われて胸が詰まってしまったことがありました。もし家族のいない子供がいれば、もし家族がいても虐待をうけていて温かい安心できる環境がない子供がいればなんとかしなければと思います。

ゾンタの活動の“女性と子供たちに手をさしのべよう”という取り組みの大切さを再認識させられた動画でした。

2020年度の活動

月	日	曜	例会場所	事業内容	委員会活動その他
2020					
6	11	木	リーガロイヤルホテル 牡丹の間	2020年度活動計画案審議	
7	9	木	リーガロイヤルホテル ゴールドンルーム	前年度決算報告及び今年度予算案審議 年間活動計画	各委員会 今年度活動計画
8				納涼会 中止	
9	10	木	リーガロイヤルホテル 桜の間	卓話 猿渡京子氏 「心の不調を抱えて生きる～ 摂食障害への理解を～」	広報紙 50号発行 内藤会員・WIT 奨学金委員長就任 9/13 奉仕委員会 銭太鼓練習
10	8	木	リーガロイヤルホテル 梅の間	卓話 山下智子氏 「京ことばで語る源氏物語」	10/10 木下彰子国際理事就任祝賀会(北九州市) 3名出席 10/11 奉仕委員会 銭太鼓練習
11	12	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	ローズデーイベント打ち合わせ	11/15 奉仕委員会 銭太鼓練習 宇川久子さん入会
12	10	木	Zoom 例会(自宅)	ローズデーイベント打ち合わせ	12/13 奉仕委員会 銭太鼓練習
	12	土	あべのハルカス(ZK)	忘年会・中止	
2021					
1	21	木	花外楼	大阪IⅡ合同新年会・中止	1/10 奉仕委員会 銭太鼓練習
	21	木	Zoom 例会(自宅)	ローズデーイベント打ち合わせ	
2	11	木	Zoom 例会(自宅)	ローズデーイベント打ち合わせ	2/14 奉仕委員会 銭太鼓練習・中止
3	11	木	Zoom 例会(自宅)	ローズデーイベント反省会	3/7 ローズデーイベント【子ども虐待の見方と支援】 (あしや市民活動センター) ハイブリット方式 で開催 会場 27名 オンライン 52名 参加 広報紙 51号発行 3/21 奉仕委員会 銭太鼓練習
4	25	日	ミホ美術館・他	移動例会・中止	4/11 奉仕委員会 銭太鼓練習
5	13	木	Zoom 例会(自宅)	1年間の活動報告、次年度に向けて	5/22 エリアミーティング・動画配信 (6/10～7/10) で開催 5/28 奉仕委員会一羊会訪問・中止



イチオシの宿

牛田 三千子



2020年7月末にコロナ第二波のピークを迎え、その後やや感染者も減り始めた同年10月初め、兵庫県朝来市の武田城址に一泊家族旅行をしました。コロナ感染防止と共に経済も立て直そうという政府の政策のGO TO TRAVELを利用しての旅です。

竹田城のふもとにある築400年の酒造所をリノベーションした宿で、家族で行くにはちょっと贅沢な宿ですが、GO TO キャンペーンのおかげで格安で風情溢れる宿と洗練されたフレンチを堪能することができました。

朝来市というのは、地理的に日本海に近く海の幸に恵まれ、但馬牛の本場でもあり、また豊富な地元野菜もあります。その地場食材をふんだんに使ったフレンチが絶品でまさにイチオシです。

肝心の有名な雲海ですが、絵葉書にあるような幻想的な情景は見られませんでした。うっすらと雲がかかり城跡ははっきり見ることができました。

まだ竹田城を訪れたことのない方には是非お勧めしたい宿(城下町ホテルEN)と食事です。

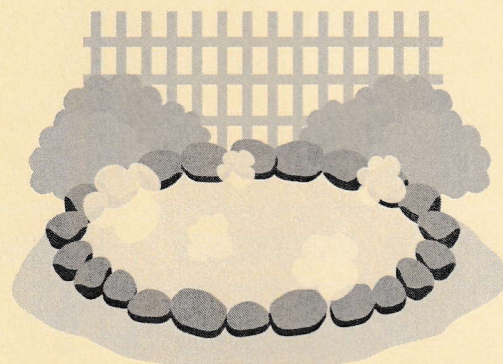
私は現代的なホテルよりこのようなひなびた感じの趣のある宿が好きなのですが、期待して行くと「ひなびた」というより「さびれた」感じの宿に当たることがあります。この「ひなびた」と「さびれた」とは似たような言葉ですが、じつは大違いでひなびた感を出すために宿は細心の注意を払っていることが分かります。放っておくとあっという間にさびれてしまうのでしょうか。

数年前に訪れた面白い宿を思い出しました。岩手県と秋田県の境にある大沢温泉に家族で行った時のことです。東北新幹線の新花巻駅でレンタカーを借りてナビを頼りに車を進めるのですが、こんなところに温泉街があるのかと思わせるような山深い道で、やっとそれらしい集落に着きましたが、宿は2、3軒あるだけでそれかなり古びた建物。

「湯治屋」という名前通り、昔は長逗留の湯治客が布団などを持ち込んで自炊しながら滞在していたとのことで、最近では東日本大震災後の工事関係者が骨休めに来ていたという宿でした。玄関を入ったときから昭和30年代にタイムスリップしたようで、帳場横の「お食事処」には懐かしい黒電話、旧式テレビ、ちゃぶ台、招き猫などが置かれており、案内された新館は(たった!)築100年とのことでした。うぐいす張りよろしく歩くとミシミシ音がする廊下やプライバシーや防犯もなんのその、襖だけの部屋には昔ながらの上から吊り下げられた電燈がぶらさがっていて子供時代を思い出し懐かしくなりました。

露天風呂も川向こうの橋の上からばっちり見えるのではないと思われる大らかさで、極めつけは三階の部屋。この建物の一階は帳場、食事処、炊事場などの共用部分、二階は三室ほどの客室があり、三階にはなにもないので上がらないようにと言われました。行くなどと言われると行きたくするのは人の常ですが、夜は暗くて怖いので、翌朝明るくなってからこっそり上がってみました。するとそこには広い舞台があり演芸場のようになっていて、人形遣いの人形や衣装がたくさん並べられていました。100年前からお祭りのときなどに村の人たちが集まって、ここで宴会や演芸を見て楽しんでいたのかしらと想像しました。

地図にもない大沢温泉の湯治屋、ひなびているのかさびれているのか、よく分かりませんが機会があればもう一度訪れてみたい面白い宿でした。



編集後記

コロナ禍のため記事集めがどうなることかと心配しましたが、3月のローズデーイベントのセミナー(リモートと対面のハイブリッド開催)の報告を入れた特集号とすることができました。今回は例外的に12ページです!

坂本千代